

糖尿病・内分泌・代謝内科プログラム

【研修目標(研修内容)・到達目標】

患者を全人的に捉えると共に、糖尿病・内分泌・代謝疾患の病因、病態を的確に把握し、その診断と治療法を十分に理解した上で、必要に応じて適切な処置をとることのできる糖尿病専門医、内分泌・代謝専門医を育成する。なお、平成26年度(2014.4)より、兵庫医科大学病院後期研修は新しい研修制度に移行し、レジデントは1年目をレジデントA、2年目をレジデントB、3年目をレジデントCと称している。

【研修(カリキュラム)の特徴】

当科は日本糖尿病学会、日本内分泌学会、日本動脈硬化学会の認定教育施設になっており、日本糖尿病学会糖尿病研修指導医は5名、日本内分泌学会内分泌代謝科指導医4名、日本動脈硬化学会動脈硬化指導医1名がスタッフとして勤務している。研修後以下の条件を満たせば日本内科学会の認定医または専門医取得後、それぞれの専門医の資格を取得することが可能である。

日本糖尿病学会専門医の取得を希望するものは、内科学会認定内科医取得に必要な3年以上の基礎研修後に内科認定医を取得し、通年3年間の当科や関連施設で糖尿病学会認定教育施設の専門研修を修了すれば、日本糖尿病学会専門医試験の受験資格が得られる。但し、専門医試験の受験には必要な書類記載が必要で、学会が求める症例数を経験し、そのうち10症例の抄録を記載し、自身が発表した学会報告の抄録あるいは論文の写し2件を提出しなければならない。経験すべき症例は非常に豊富であり、2型糖尿病はもちろんのこと、1型糖尿病、妊娠糖尿病・糖尿病合併妊娠などが研修できる。また合併症進行例や感染症例、とりわけこの分野での代表的救急疾患である高血糖高浸透圧性昏睡や糖尿病性ケトアシドーシス、低血糖などの診断・治療も経験・習得することができる。他科との共観例も非常に多く、周術期や分娩時の血糖管理、ステロイド使用時の血糖管理など糖尿病研修に必要な症例を経験できる。

内分泌代謝科専門医を取得するためには、継続3年以上または通算5年以上日本内分泌学会の会員であること、内科認定研修の課程を修了後、日本内分泌学会認定教育施設において内分泌代謝科指導医の指導の下で3年以上内分泌代謝疾患の診療に従事し、内分泌代謝疾患の臨床に関する学会発表、または論文発表が5編以上あり、少なくとも2編は筆頭者であることが求められる。経験すべき症例は非常に豊富であり、2015年度には、間脳下垂体疾患62名、甲状腺疾患26名、副甲状腺疾患及びカルシウム代謝異常15名、副腎疾患87名、電解質異常23名の入院加療実績がある。

動脈硬化専門医を取得するためには、継続3年以上日本動脈硬化学会の会員であること、内科認定研修の課程を修了後、日本動脈硬化学会認定教育施設において3年以上動脈硬化学のカリキュラムに沿って研修することが求められる。2015年度の動脈硬化性疾患、動脈硬化リスク評価と管理目的の入院患者は110名の実績があり、十分な研修が可能である。

また、当科スタッフには日本痛風・核酸代謝学会認定痛風医もおり、希少な遺伝性疾患も含めて痛風・高尿酸血症患者の診療機会が多く、認定痛風医の取得を目標として研修も可能である。

【後期研修カリキュラム (卒後3年目：レジデントA)】

当科は、①糖尿病診療に特化・深化した**糖尿病グループ**、②内分泌・代謝疾患を広く診療する**内分泌・代謝グループ**、の2つの診療グループからなる。一定期間交互のグループに属した研修を行い、糖尿病・内分泌・代謝領域の疾患により広く対応できる医師を目指す。

1. 糖尿病グループ

専門性の高い糖尿病診療に特化した、また糖尿病に合併する種々の疾患（網膜症、腎症、神経障害、高血圧、脂質異常症など）の研修が可能である。糖尿病診療を病棟・外来で行うと共に、他科の医師と連携を取りながら、専門医研修だけでなく、内科医としての研修を行っていく。各自5～10名の患者を受け持ち、指導医と相談及び指導を受け、また1～2年目の研修医と連携しながら患者の診療に当たる。インクレチン関連糖尿病治療や種々のインスリン治療法、CSII(continuous subcutaneous insulin infusion、持続皮下インスリン注入)などの最新治療法やCGM(continuous glucose monitoring、持続血糖モニタリング)を用いた最新の検査なども研修することができる。さらに、CDE(糖尿病療養指導士)や管理栄養士などメディカルスタッフとともに糖尿病におけるチーム医療、糖尿病合併症の評価や腎症合併患者に対する透析予防指導、フットケアの実際なども学び、専門医を目指すために必要な研修を行う。

2. 内分泌・代謝グループ

専門性の高い内分泌疾患の診療に加えて、広く代謝疾患の診療に関する研修が可能である。内分泌・代謝疾患の診療を病棟・外来で行うと共に、他科の医師と連携を取りながら、専門医研修だけでなく、内科医としての研修を行っていく。病棟診療では下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患、糖尿病、高血圧、脂質異常症、高尿酸血症、電解質異常、動脈硬化性疾患などを中心に5～7名程度の患者を担当する。これらの疾患の病態把握に必要な病歴の聴取法、身体所見の取り方、検査法等を十分に習得する。特に、甲状腺疾患、副甲状腺疾患や下垂体・副腎疾患等の内分泌疾患については、その診断や治療に必要な超音波検査や種々の内分泌負荷試験等を実際に行い、技術の習得に努める。一方、糖尿病、高血圧、脂質異常症、高尿酸血症等、生活習慣に関係の深い代謝性疾患の病態を十分に把握した上で、エビデンスに基づいた治療を行えるようにする。またこれらの疾患は脳血管・心血管系疾患などの合併症を有する症例も多いため、動脈硬化のリスク評価や他科との連携診療の重要性を認識した上で、その診療に携わる。研修医の直接指導も行う。研修医を指導する事により、内分泌・代謝疾患の診断、検査、治療等についての理解や知識をさらに深め確実なものにする。

【レジデントA(卒後3年目)の他部署研修について】

総合診療能力のスキルアップのため、基本的には以下のいずれかのコースで、他部署研修を希望により行うことができる。

- ・超音波センター、放射線医療センターのいずれかで3ヶ月間研修するコース
- ・総合診療センターで年間を通して月2回の外来研修を行うコース

【後期研修カリキュラム(卒後4-5年目:レジデントB, C)】

卒後4年目以降には、病棟での研修に加えて、必要に応じて糖尿病・内分泌・代謝内科外来で週1回の診療を担当し、外来における糖尿病・内分泌・代謝疾患の診断、検査、管理及び治療等を幅広く、かつ深く習得する。また興味ある症例については学会等にて1年間で1～2回程度の発表を行い、主なものは論文としてまとめる。

【回診・カンファレンス・症例検討会等】

糖尿病・内分泌・代謝内科としての主任教授による総回診は毎月奇数週(第1および3週)の月曜日15時30分から行い、回診終了後に診療科医局会を行う。糖尿病グループおよび内分泌・代謝グループのグループカンファレンスはそれぞれ、火曜日、水曜日に行われる。不定期であるが、院外での関連研究会、講演会も多数開催されており、診療科のメンバーとして自由に参加できる。

1. 糖尿病グループ

グループカンファレンス： 毎週火曜午後 2 時～ 5 時

2. 内分泌・代謝グループ

グループカンファレンス： 毎週水曜 午後 4 時～ 6 時

症例カンファレンス・抄読会： 毎週金曜 午後 2 時～ 4 時

【教室、検査等】

糖尿病教室：毎週金曜午後 3 時～ 4 時

甲状腺エコー・穿刺細胞診： 毎週水曜 午後 2 時～

頸動脈エコー： 毎週月曜日 午後 3 時～（糖尿病グループ）

毎週水曜日 午後 2 時～（内分泌・代謝グループ）

【大学院入学・医学博士号取得】

当科では、糖尿病・内分泌・代謝疾患の専門医を育成するだけでなく、臨床研究・基礎研究を通じた医学研究者としての素養を養い、未知の分野に積極的に挑戦・開拓する能力の育成も重視している。そのため、希望者には大学院入学、あるいは研究生としての研究への参画も推奨している。

【関連・出張病院】

（下線病院は卒後 3 年目以降の臨床研修として派遣実績のある病院です。）

県立西宮病院、宝塚市立病院、市立芦屋病院、伊丹市民病院、市立川西病院、大阪中央病院、川崎病院、池田病院(尼崎市)、神戸海星病院、大阪中央病院、恵生会病院、井上病院（吹田市）、杉安病院、上ヶ原病院、宮宗病院、尼崎中央病院、いぶきの病院、阪和病院、青山病院、牧野病院、津田病院、大阪市総合医療センター(大阪市)、笹生病院(西宮市)、多根総合病院（大阪市）、フジタ病院（大阪市）、行岡病院（大阪市）、暁明館病院、池田病院（東大阪市）

【指導医】（学会専門医ないし学会研修指導医）

主任教授：小山 英則（糖尿病、内分泌・代謝、動脈硬化）

教授：森脇 優司（内分泌・代謝、痛風）

准教授：勝野 朋幸（糖尿病） 講師：庄司 拓仁（糖尿病）

特任講師：楠 宜樹（糖尿病） 助教：徳田 八大（糖尿病）

助教：美内 雅之（糖尿病） 助教：角谷 学

【研修統括者】

勝野朋幸

【問い合わせ先】

糖尿病・内分泌・代謝内科 研修管理委員

勝野 朋幸 TEL：0798-45-6592（医局） E-mail：katsunoa@hyo-med.ac.jp